

宇治市芸術文化協会 紙上演会 2021 in 宇治

講師 沖田 悟傳 (同志社大学教授)

新型コロナウイルスの影響下で全世界的に、芸術文化活動が危機に瀕しています。こういった社会情勢の中で、教育はもとより芸術活動への深い洞察をお持ちである沖田先生に 自身の経験を踏まえた芸術への思いを語っていただきます。本来でしたら、講演会場で直接お話し頂くところですが、感染防止の観点から紙上演会の形式でお願いいたしました。

沖田悟傳 教授の紹介



幼少の頃からヴァイオリンに親しみ、学生時代はオーケストラ部のコンサートマスターとして活躍。卒業後、宇治市立宇治中学校などで数学の教師として教鞭を執る傍ら、ブラスバンド部や合唱コンクールなどを熱血指導。その後、府立学校初の中高一貫校である洛北高等学校の副校長として赴任。更に、京都府教育委員会指導部学校教育課の課長、京都府山城教育局長を歴任し、現在は、同志社大学教授、特定非営利活動法人教育行政支援機構の顧問として地域の教育活動を支援。

♪♪♪♪♪♪♪♪ 音楽は素敵な世界 ♪♪♪♪♪♪♪♪

はじめに

この度、宇治市芸術文化協会の機関誌『芸文協だより』において、紙上演の栄誉を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。現在、私は同志社大学の教授として、教職課程の講義（教育制度と学校経営等）を通して学生の指導に当たっていますが、以前には宇治市内の中学校の教員として勤めていました。本稿では、私と芸術文化、特に音楽との出会いや関わり、音楽に対する思いなどについてお話ししたいと思います。



音楽との出会い

私の家族は、両親と弟の4人家族で、父は一般のサラリーマン、母は専業主婦という音楽とは無縁の環境で育ちました。私と音楽との出会いは、小学校2年生のとき友達に誘われて、オルガンを習いに行ったことです。オルガン教室には2年間通ったのですが、あまり熱心な生徒ではなかったように思います。しかし、教室の先生から「音楽を続けられたらいかがですか」と声をかけていただき、3つの教室を紹介されました。1つがピアノ、2つがエレクトーン、3つがヴァイオリンの教室でした。その当時（今から50年以上前）ですが、既にピアノは数十万円と大変高価な楽器でした。また、今ではエレクトーンはコンピュータと連動するような凄腕楽器ですが、当時は社会に出始めたばかりで若干不安がありました。そしてヴァイオリンですが、子供用の楽器は一万円で一式揃いました。我が家は、決して裕福な家庭とはいえませんでしたので、迷わず一番安価なヴァイオリンを習うことになりました。実は、このことは将来とんでもないことになります。このような経過で、小学校4年生から近鉄桃山御陵前にあるヴァイオリン教室に通い、レッスンを受けることになりました。皆さんもご存知のように、初心者が弾くヴァイオリンの音ほど近所迷惑なものはありません。当然私もひどかったので、夏でも窓を閉め切って練習していました。オルガン同様、練習嫌いな生徒でしたが、中学3年生まで頑張って教室に通いました。高校の3年間は、レッスンの先生が変わられたこともあってヴァイオリンから離れた生活を送っていました。そして、京都教育大学に進学したのですがここでまた新たな出会いがありました。入学当初、何気なくサークルの勧誘風景を眺めていたのですが、オーケストラ部があることを